九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

翻刻「世中に」随筆

石川，八朗

https://doi.org/10.15017/12302

出版情報：語文研究．15，pp.37-51，1962-12-31．九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

翻刻「世中に」随筆

石川八朗

九州大学文学部国語学国文学研究室蔵。大本一冊。料紙墨流しにて墨付二十八丁の写本。湿害甚しき丁を裏打して新しく改装した表紙には、左肩に題簽を貼って、冒頭の文句をそのまま「世中に」と仮題してある。内題なし。奥に「慶長七年五月廿五日雨中ニ書是也」とあるが、当時の筆と見做してほぼ誤りあるまい。朱墨両様の補筆があるが、本文と同筆か。今翻刻に当って、（ ）内は補筆、ヒヒヒヒヒヒはみせ消ち、〔 〕内はその訂正、濁点にはマヽとするが、朱の場合にはそのいずれにも※印を付す。又、読点、△印はすべて朱によるものである。以上、校訂者事故のため、編集部において書誌のみを記す。

本書の内容に関する考察は、松平文庫蔵の類本「仮枕」の紹介とあわせて、稿を改められる筈である。

世中に春秋をこそ、おもしろくつれ〳〵にさひしきたとへにも、昔の人は申つたへ侍れ、春もすき、夏もなかはたちゆき、さ月の比ハ物ことににきはゝしく、天かしたのたミハ、ひととせのいとなミの種とて、をのかとち打むれ〳〵水田におりゐつゝ、手ことにさなへとりもち、みそ河をもかへりみすはしりありきて、かほかしらにもとろつちなんとをつけ、女とちハすちなき田うたとやらんうたひ、男女あなたこなたとまとふありさまことにいそかハしけなるふせひ、けにも一とせのいとまをもこの時なむとられぬるとそみえし、さはあれともをのかなさぬわさなれハ、時も日もか」はらねと、をのかすむやのさひしさ、せん方なし〔く〕つく〳〵と暮し侍るに、一オ

空さへさつきの比ハつゆとやらん申ならはして、春雨のやうとしめ〳〵と、昨日（ヒヒ）もふり、けふもふり、かたときたにもをやまねは、たつ我身ひとつの雨にしもおほえて、よそにハなき事のやうに、みゝたちきこえ侍りぬ、あ

やめふくかやか軒はに風すきて、しとろにおつる雨のあしさへうらめしく、軒に音するかけひの水もこゝろほそくやる方なし、これやさなから世をいとふ深山の、すまゐならましと思ひしられて、ひとり枕をそはたてこし方行すゑをおもふに、我（レ）※おろかにも世をうらミ侍るにこそと、はかなく」くちおしくおほえて、そもさひしとハ何事をかおもへる、朝かほの露日かけをまたぬうき身の、夢みる程もあたし世に、なにをかさのみ、なけきこりつみ侍るそと、こゝろに心、いさめられてともしひのもとにおきゐつゝ、すちなき跡なしことを筆にまかせて、いまの程のつれ〳〵をもまさらハし侍れハ、身をしる雨もはれ行、心（の友もおほくいてこし心ちしてなくさミ侍るまゝ、心）のかきりかきすて侍るなり、もしこのことのはのちりうせすして、とりの跡ものこりとゝまりなむ後、御覧せん人のいかはかりおかしくかたはらいたくおほしめしなむ、あさはかなる心のうちを見えたてまつらむも、はしたなくうるさけれと、心にかゝるむら雲をもはら」ひ、友なき身のともとして明し侍る、雨のよのつれ〳〵思ひやりおほさむにハ、かつはことハりとや御らんしゆるす人もやあ「侍」らむ（※ヒヒヒヒ）（※かし）たとへ尋とむる友なりとも、我心にひとしからすハ何のかひにはあらん、身の為にハ是そうれしき友なるへし、いにくにも昔、かゝる心の人や有けむ、王子猷といふ人、山陰といふ所に住しか、世中のわたらひにもほたされす、春の花、秋の月にこゝろをなくさめて、ひとり明し暮しけるか、ある夜月にさそはれて、たかせ船にさほさして、戴安道まて月みるともを尋行に、夜のほの〳〵と明けれハ、いまハかひなしとて、門の本よりかへるを人ミて、これまてはる〳〵ときたり給ふ」心さしを、友人にもみせたまへかしといへハ、こたへていはく

もろともに月みむとこそいそきくれかならす人にあはん物かハ

といひて、つゐにかへりぬ、こゝろのすきたる程ハ、是にもをとらしと我からおかしくおほゆ、たゝ露のまもうき世になからへぬる思ひ出に、山のはをいつる月を（も）まち（え）、春秋の花もみちにて、心ハなくさめまほしき事にこそ侍れ、かなはぬ世をうらみてもかひ（せん）なし、何はのよしあしことをも、時のまも忘なむこそ、則心成仏ともいはまほしけれ、万事ハこゝろからもとむる物にあらさる物にかは」

（空白）

うれしきもの

一ウ　二オ　二ウ　三オ　三ウ

△ひとしれすおもふ中の契△ひさしくあはて、こひしき人に逢目ちかつく△もろとりにおもふ中の、しなはをくれしと、いつはりならぬ気色していふは、いかはかりかは、おもふかひありてうれしからむ△たはふれことなといひあかりて、とをさかり行人の、こゝろから千たひくやしくゆかしけれとも、さなからきたいひよるへきたよりもなく、をのつからわかれ路に成なむと、むねつふれて見ゆるに男方の友（※なんとの）きたりて、いかてこのまゝにてハすくし給ひなむや、女の御方にもこの比ハなかめかちにのミものしたまふか、ふる「か」き山路にもたつね」いり、世のうきめ見えぬ所をも御覧せさほしくおもほしなからも、あかぬ別のほたしに（ヒヒ）、はか〳〵しくも思ひたちたまひぬこそ、いとおしくも侍れ、たゝ思ひ返したまへをのれかいふやうにして、人をもいさなひたてまつりこむると、いふを聞人おもはゆき心にもかきりなく、うれしき物とこそ見ゆれ△我ならねとも女人の、まつしくせん方なき人の、その君かの君よりほかひ所の、れうたひぬと聞も心やすくうれし△ひさしくあはてとしふる程に、ちこのおほきになりたるうれし△田舎にひさしく居たる人のかへりきたるもうれし△たよりにつけてふみをこしたるも△むつかしきなそたてときたる」△のかれぬ人の子うみたる△（※てかく人の）物よくかき出したる△町かひのほりいたしたる△ことかく物を人の本よりえたる△わすれたる文字、詩哥なと見いたしたる、かきりなくうれし△わかこゝろにかなひたる道具、人のほめたるを聞く△たくひなくおもふ人の禁中の御やくにしたかひ、なむなくつとめたる△しりたる武家の人弓矢にかち、くるしき所をのかれきたる、いつれもひかましくおもふ方は、よろつになき事聞こそうれしけれ△いそく船路の旅に行に、かせわろく船まちして、いまた五日三日も波風なをりかたしといふをきく、こゝろのうちの、まちひさしくとけしなくおもハれて、れうにも成て雲にものほ」り、て、おもふ所にゆかてとつらつえをしつゝ、そなたハかりを見ふせる（に）にわ「は」かに風なをりぬ、ふねいたさむとひしめくうれし△しらぬ旅の空にて、古里の人にあひてことつけしたる（ヒヒ）△よろつのたうく、おもふまゝにこのミいたしたる△かきりなくひさうするたかをそらして、そこはかとなき、山のかたはら、杉ひはらなと見ありくに、空にふとすゝの音するを聞いてぬるうれしさ、たとへむ方なしと、人のかたりし△うつしうへたる草木に花ミのなりたる△もとめかねたる草花（を）人のえさせんといふうれし、すかさる人ハさもあらし△いつくともなく、うせぬる人のあり所を聞いてたる△朝夕手なれてかハゆきね」この子をうしなひ尋ねたるにもとめ

いてゝかへしたるうれし△月まちゐたるに、しか〳〵しさともなく、ねふり「むく」めとちふたかり、まちわふる比、ほの〳〵と廿日あまりの三か月の、山のはにいてぬる、有かたし「く」うれし△日をまつ時夜の明たるハ、心うか〳〵としてせひをわき（か）たくおもふものなり△貴人高人の御前よくしてまかりいてたる△子もたぬ人のおのこさふけたる心△甚すく六のしよむにかちたる△すくろくのこいめうちたる△いまたミぬ事ミむといふ日のちかつく

かなしき物　付あはれなる物

△あかぬ別　△いまはのきは　△送りすてゝかへる野　△なき人のかたみ　△なき人の為にたつとき僧に、ふしゆもんつくらせよミあけたる　△なき人を夢にミたる暁　△あかてわかれし人のふミ取いてゝ見たる　△なき人をとりへの、ふなをか山へをくりてかへるに、みちうちにけふりのたちのほるを、ふりみらるゝこそ、あはれにもかなしけれ　△冬野にのこる虫の音　△八千世をこめて契れる人の、おもハす世をそるゝ事いできて、このあかつきハいつちへもさとひさからん、命あらは又こそめくりあひ侍らめ、さためなき世のならひ是もやかきりならましと、よゝとなきて我にもあらぬ気色して、かミ一ふさなむときりて」（かたみとて打をき）まかれる人のこゝろ、跡にのこらん女のこゝろいかはかりの事をかおもハまし、されとも男ハまきれかちに忘れなむ、女こそつたなくかなしき物なれ、一かうにかきりの道にわかれはてなは又、なくさむ方も中〳〵有なむ、あかぬ別こそうらみハおほかめれ、さハいへともさたある世のわかれ（も）、いまはのきはこそひときは猶かなしからめ、いまたみすしらぬ人も、かきりと聞ハおしくいとおしくおもふそかし、ましてたくひなくおもふふう婦、親子兄弟身にをとらすおもふ友なとの、いまはとおもハゝいかゝ心さとハん、かれよりさきに我玉のをもやりてましとおもへとかひなし、いまこしこゝろもあれかし、引」もとゝめて、いまひと声もきかてとまほりゐるにたゝさえ〳〵ときえ行かきり、かなしとも中〳〵たとへて、ことのはやあらむ、めつらしからぬ事なれとも人間の生死（の）さためなきは、誰かはのかれ侍るへき、昨日ミし人もけふハ（※なく）今朝ことの葉をかはせし人も、ゆふへハはつこつ（のちり）と成ぬ、年々歳々花相似、歳々年々人不同とふるき人もゑいせし也、ことはりにこそ、なき人のなけきのゆかりのつきさるも、百か又はひととせのうち也、いまた名残つきさる程ハ、月をミてもかこたれ、花のもとにても、おもかけさらぬなけきをさきたて、暁のかねにしうたん

六オ　六ウ　七オ

の夢をさまし、夕（への）入相の」音にハ、うれへの涙をそへ、ゑしやしやうりのことはりをも忘れて、こひかなしみ、こゝろをみたす事つきす、かの白楽かことの葉にも、玄宗皇帝楊貴妃の別をおほししつまれしを、をしハかりて、行宮見月傷心色、夜雨聞鈴断腸声とつくりしも、かなしきあちハひよくしりにけん、まことに身にしみてかなしき時は、はらわたもされ、ちのなミたもおほく出ぬへくおもほゆるなり、されともかなしき生死の別路をしたひて、死するものなし、月日にそへてわするゝハやすく、まさるハまれなるへし」

七ウ

いとおしき物

△ちいさくおかしきちこのはいありく、しらさる人も我子のいとおしさも、ちこにへたてあらし△へたてなくたかひにおもふ中の、心うちつきたるハいかはかり、いとほしくたのもしからむ△親このかみのたいせつにいとおしきにハ、しな有なむ、智者も愚者も、たかきも、ひきも、はちをも、人めをも一すちにわするゝハ、ふう婦の中にこそ侍るめる「れ」、昔もいまもこの道をまかふ人はなきにやとおほゆ　△又身のよき人のなりくたりて、さしもなき者にしたかひ給ふもいとおし△女ちこかつしきいうに心ほけたるいとおし△とをくてもこの子ハ」世にはいとおしき物にや、まこをいとおしまぬ、親のおやもなし、鳥けたものゝかハゆきハ△ゑのこ△ねこの子かはゆし△なつきたるすゝめの子△ひよこも△うつはりのつはめ△やけのゝきゝす哀なるへし△うちすゝめといふ虫もにくけなし、名のなつかしき物△こてふ△うつせみ△日くらし△すゝむし△松むし△きり〳〵すなるへし、草木の花にいとおしき心ちするあり△うす色の八重桜△こうはいさくら△からほたん△うす色のはちす△しやくやくハいつれもなから、こきひとへはねちけたちてわろし△きくハすいやうひ△さねもり」

八オ

おかしき物

△物見に人のおほくあつまる所にて、ふかく忍ふへき人の、かさくわとうなとにて、かほをつゝみかくして、いりきたる人の折ふし、人つとひてをしあひ、我人つかミあひなとして、いつしかつゝみしほうしかさもかなくりを（と）されて、身ハ袖なかき黒衣のたうとけなるに、かしらはそかうひたいとかやのなてつけなる男の、出きたるこそおかしくみくるしき物なれ、あさましへしれる人に打むきこしかゝめ、しきたいするハせん方なき物見なれ△説法の庭にて、老若きせんくんしゆする中に、ねふりをさまさむとて」さんしよくい、むせきちめくもせう

八ウ

九オ

九ウ

しにおかし△酒宴の所にて、ゑこ〳〵とふとりはらふくれたる男の、ミしかきはかまをむなたかにきなし、むてうはうなる、きやうけんするもかたはらきれておかし△禁中の御政事をこなはるゝ時、つとひ給ふ公郷殿上人の中に、よろしくさもとあるおきな、こゝろあはたゝしくて、すへりころふ〔ひ〕かうふりなとおとしかすをなる、かしらつきしてありき給ふもにか〳〵しくおかし△又ある心あはたゝしき者憑む人の本より、二三里ハかりある所へつかひにまかるとて、此ハ霜月のすゑつかた、雪ふりつもりぬる山里の家居なれハ、ふもと」につくりかけたる、らうにしりかけて、わらむちしめはくとて、れいのあはたゝしき心ちに、かたつかたは足にはかせぬ、いまかたつかたは、えむのつかはしらのぬけあかりたるにゆいつけをきて、はしり行に門のほとりなるをのこともあやしみて、いつちへの御つかひにやといひしかは、されハこそとよそ〳〵へまか（れ）るハ〔か〕此雪ふミ分かたし、あはれひとつとふらはぬかといひけれハ、いとおしや折ふし酒ありあはねとも、をのらか風ふせきをけとも先わけたてまつらんとて、ちやきむのすゝきしるをのませぬ、有かたしうれししとてさしうけ〳〵三ほしてまかれり、あとにて友」ハ手をたゝきわらひあひけり、程なく立かへりていふやう、かしこうよき酒をえし物かな、そのあたゝまりなくハ、よからましかハ、けふのなさけにこそさむき嵐をもしのき、すねにはきし、わらむちきれうするも覚えぬまて、ゑい心ちにこそ侍れとよろこへり、かくあはたゝしき心ちにかゝる事おほかりぬおかしと聞侍し△老人の上座にしこふありて人のしなむおとなしくをしゆとて、いかゝしたりけんとりはつして、おもはさる外のけかせしけうさめたるこそ（にか〳〵しくもくち）おしけれ、わかきとちハしたをくハへめをひそめておかしけれと、えわらハてをる（か）中らうの人の聞しらぬていして、ついたちていぬる（も）猶おかし△ミつハかりの子のかたことひて、物まねしたるおかし」△てうはうかましき人の、十めむつくり人まねしたる△にくからぬ友うちよりて、すちなきことをかたりゐたる△男女ともにまへしとけなくたちゐしたる△にほひする人のかうろけちらし、あつやとをとりあかるハいつくにか火つきぬらんとおかし△十種香の時よろしき人の一首もあたりたまいて、手もちわろきもせうしにおかし△しるき道、又ハ風呂のあかりはにてすへりころふもの△さとうの犬にをハれたる△物いはぬをしといふものゝはらたゝしき△みゝきこえぬもの、人のあさけるハしらて、我ハかり物いふおかし△貴人高人の御ひけにいひつぶつきたるハ中〳〵おかしからす、」

十オ　十ウ　十一オ　十一ウ

しもさきのものゝ、ほうさき口もとにいひつふのつきたるもしらて、かしこまりゐて、しきたいするをむかひゞんする人は、えわらハてハゐるさし△にこり酒このみのむものゝうはひけにしろくつきたるきたなし△むてうはうなるものゝおとなけなきかめなしとちしたるおかし△てんくわらひ△たけわり△たんは△いろはわたしして、まけたる人のはなに、かみつけられたるをみるこそおかしけれ

にくゝはらのたつもの

△いしわろきもの△人ことといふ女△人なふりする者△人をしゆそする僧、いんやうのかミ、身をすくるわさなからも、さまてもありな」ましにくき事也△子をすつる母△子をうる親△あひおもふ中をさくるもの△さんそうして中ことといふもの△よしともおもはぬ客人のなかさ「ゐ」△たんきせつほう、けんふつのまへにて口たゝく女△物見てまかれる時をのれはかりめもちたるやうに、人をもけちらしせいたかく成てひとつも見をとさしとする者ハ、何よりにくし△かならす物見ハ友にとかたくちきりしもの、いたしぬきひとり行たるにくし△おもふといつはるをもしらて、八千世とかたらひ懸む中のかはりたる△ひさうする道具、心なく打わりたる△いさたいとけなく十にたにたらぬわらハへの、老ひかミたるものゝ物いふやうにこせ」ことといふにくし△うとからぬ人のわかうしろことといふと聞たるにくし△花になさけなくあたるもの△雪の朝こゝろなく跡ふみつくる者△身かほになりて物いふ人まことかと打とけてかたらふに、つきをとし、うらかゝせぬこそいふせくにくけれ、人はたゝこゝろこそよくもちたき事なれ、姿かたちはみるめはかりにて、男も女も心程に世をわたる物に侍り、かへす〳〵もねちけたる心うとましき事に思ひしるへし△酒宴万の遊にもしれたるものゝましりぬれは、興をもさましてふし〳〵になりて心そまさるもの也△さかつきの数も人のハいひけち、我ハなほ〳〵とひかへのまさるものにくし」△我こそとかたことちりまぜて、よろつに物しりかほする人△身の程を忘れのひあかりいたかする者△めしつかふものゝかへりことせぬ、ましてすねことひてくちこたへするいよ〳〵にくし△僧法師のけしからす女をみて、あなかちなるかほつきにくし△人の家とうしのはしちかくうかれいてゝ、あれこれと人ことになむをいひちらし、男をみてわらひざれたハふるゝものゝくせとして、時々ハこと〳〵しくけんしやふりいふこそおかしくもにくき物にもあれ、世に女ほとかなしき物あらし、葛藤無自力他依上木滅是とみえて、ひとり世をふるにたよりなし、さり

十二ウ

十三オ

ともと」思ひて、たちよる木のもとも、折にふれ時にあたりて、花そめ衣の色かはり、秋のもみぢとうつりゆき、たのむ木かけのつらけれハ、いとゝ時雨に袖はぬれつゝ、明暮そほつは、女の身ひとつなるへし、かゝる身のすくせつたなくて、又世をわたるたつきにおもはさるうきふしのたよりをもとめなむハせひなし、ひとりを頼ミたのまれて又ことかたへ心をなひけなむハ仏神三ほうの御心にもそむきあ（さ）ましき〔く〕（うき）名にもやたちなん〔を（や）なかさん〕女はふかからすあさからす人の哀をも思ひしり、さなから又こゝろよハからす有た事也、されハとて我こそふりてかとたつも見にくし、心たにみたれすハ」をのかすかたハにくからすとも有なむ、昔より為しおほきならひと、よからぬ事をならひて心をみたすならん、（けんし）伊勢物語にかきしるし侍るもかゝることを見聞て、よきハよくあしきハあしき道をふかくつゝしむへきかゝみにしも、是をもちゆ也よくこゝろえしるへき事にこそ△又こゝろしうねくいじわろき人ハかならす末の世にあしき事ありと聞もおそろし△ねすみに草子万の物くハれたるにくし△人に物をぬすまれたる△草木の花に有△あふちの花△百日紅△はせをの花△あかほけ△かんらいこう△ひるかほ△さゆり△鬼ゆりハ名もおそろし△ちうやくといふ草」のにはひこそにくき物なれ△いまたにくきハ人をくいさす虫の類△しミ△あぶ△はち△のミ△はい△蚊、夏ハあつき日を暮しわひ、やうやう暮かゝる程庭のおもてもすゝしく、月ハくまなくすみのほりぬ、月照平沙夏夜霜あきらかにして、池水にかけをならふるもたくひなく涼しくミゆ、にくからぬ友なとをかたらひむすふ清水にさか月をうかめ、もろともに明行空もおもほえぬまてなかめ侍るに、れいのか（あそここゝより）声たててさしくふにくき事物にもにす△我よりおろかなるものの、ねちけかましくおり〳〵こと葉に公事をあらせて、にくいひしたるこそにくき物なれ、是をとくいはむとすれハ」むかしよりいひつたへたることく、狂人はしれハ、不狂人もはしるとやらんにてくちおし、いはれハ我たうりあるとこゝろえて、猶をとしめて人聞ミくるしくいひたつ、かやうにりひなき物にこそもてあつかハめ、いにしへより智者のわさにあらす、愚者のなす処なりかかるものには、ところをさりてことの葉にかくへからす、三界無安、猶如火宅と聞時ハ、苦の世界に生れ侍る身のやくと聞すくしてもあらまほしく、たんりよハみれんのさうといひつたへたると思ひとりても、みる事聞ことに心をうこかさすといふ事、ひとりのミにかきるへからす」

十三ウ　十四オ　十四ウ　十五オ　十五ウ

△内裏の御遊△いうそくよきと聞ゆる人△字文にすくわかう人△手よくかく人▽月の夜かすかにものゝね（の）きこえたる△みすのうちの空たき△行かふ人のかうはしき袖の香△こし車の下すだれのひまより、色めきたる衣のつま出たる△物こしゆかしき人△とをく聞笛のね△文字詩哥なと人の忘れさせ給ふを、さして（も）おほえぬ人の思い出して、それ〳〵といふこそ、見まさりしていうに心にくし△山中又ハかたいなかのすまゐに、あら〳〵しくさもありけにもみえさる所に、すいかきつき山なとして、ふるひたるにはの木すゑに、八重さくらのあをは」

十六オ

かちにさゝみたれたる、よそなからミる心にくし、あるしいかならむとなつかしくよひ出ぬへくおほゆ△物みる所にても人の詩哥なと送らんに、かへりことめやすくはしりかきするもみてよし、折ふしたんさくすゝりなとわすれてまとふに、これに候とてそはよりまいらせたるもこゝろにくし△松杉のかけにしらか人のほのみえたる△都ならす「ぬ」※山里にかゝりの木をうへとき〳〵まりのおとするもゆかし△男も女もさしよりこゝろゆうにさるから、ぬ（ヒヒ）からすさしすきぬこそゆかしく、心にくけれ、みたき物あり△おもふ人のかほ△いまたみぬまつり△都にて田舎△いなかにて都△人のはしめてむかへたる女△すきに入」たる（と聞）※道具△文集類△遠さかる人のふミ△めつらしと聞事△やんことなき人の御むすめおかしきと聞△おもしろきと聞事　何よりも逢不逢恋のみちに人まとふなるへし、かのなりひらハうつの山にいたり夢にも人にあはぬとなけき、かんの武帝ハりふしんを恋かなしませ給ひて、反魂香をたかれしもゆかしき姿を御覧せんか為也、このひとすちと、世をわたるひとふしと、おもひすてぬる賢人聖人、まさにいまの世にあらむや、もろこしに堯と申御門ハ、許由にくらゐをゆつらむとて、三たひまてめしいつれとも、あへてまいらす、あまさへにこれる世にすむゆへ、かゝるきたなき事を聞也」

十六ウ

十七オ

とて、頴水といふ川にて、耳をあらひしもこと〳〵しくきこゆ、又巣父といふもの、牛をおひてこの河をわたりけるか、きたなき事を聞て、みゝをあらひしなかれの水なれは、けかれなむとて追かへして、はるかによけてわたりぬと申つたへ侍るハ、よくにあひたる友のあつまれる御代にや、又宗きよくといふ人かたちならひなく、智恵さへかく世にたくひなくきこえし人なり、父となりにうつくしくたえなる女あり、この宗きよくを心にしめて明暮となりのかきにのみたてり、男もゆかしくなきにしもあらねと、心いうなる人にて人にも物をおもはせしと、三と

せふれともめをたに見やらてすきぬ、」女もおもふかひなくて、いたつらに思ひしにしてんけりと、蒙求にもかけり、かやうの賢人は、いまの世のつたなきこゝろにたとへておもふにくまなき月を水にうつしてみるやうに覚えて、けにさもありぬへき事に（しも）とらへかたし、かゝる事こそ末世にてありかたく侍らめ、さのミとんよくにこゝろをそめすとも有なむかし、人間万事本来一物なく、色身空なりとこゝろえハ、時々とんよくの念もをとりゆかんや、ましてれんほなとに（空）心をみたし、命をすて身をいたつらになさんことを、ささとせんハこゝろうき事なるへし、たゝよろつなにはのことも、よのつねにすくしてありたき物也、されとも昔のかしこき」ひしりの御代にも、よき程のたくひなりかたき事にや、我も人も、なをさりにのこして、すてたき物こゝろに、五あり、はらたゝしき心、いじわろくまがる心、よくふかくむさき心、身のほとしらすのびあがる心、れんぼにそむる心

こゝろにをしへて、もたせたき物、五あり、

正ぢき、ちひ、かんにん、礼義、無常

涼しくミゆる物

△あつき日の夕たち△たきおつる山河△あさ河のなかれ」△池水にましるかきつはた△松杉しけりぬるかけに、いつる清水△水とりのうきたる△草木ハいふにをよハす何にも水そゝくこそ涼しけれ△玉のはちのおほきなるに、水を入、玉のさかつきうかめたるすゝし△うち野の松はら△はせをの葉におつる雨△なてしこ、いとすゝきの、露をもちたる△なによりも涼しけにミゆるハ、心ちよけにひろこれる、はちす葉の池水にうきあがりたるに、一村雨のかゝりたるにも、玉をあらそふ（に）露をふくむ「める」花の色こそ、たくひなき物なれ、さなから彼極楽世界の、上品上しやうにひらくる、正蓮華に、仏坐し給ふと聞も是にや」

けたかくみえてありかたきもの

△元日の四方はい△こてふはいの出御△てんしを春のはしめ、おかみたてまつるこそ、かたしけなく、ひとゝせのいのりをえたる心ちして、ありかたくおほゆ△内侍所の御すすの音△行幸の楽の音△貴人の参内△節会△同出御に御釵もち給ふ内侍、朝夕めなれぬるにこそ、はしめて見たてまつれる人、いかはかりありかたくおもへらん

△れんしの舞△七夕にくろ戸にして花たてられたる、いつれも内の御あそひのをろかなる事なし△又武家にも大将の出陣の門出なとハ、めつらかに見ところあり△花にハ△白蓮花△白玉△桐花」△夏きくの大白　十九ウ

見事なるもの　付おもしろき物

△御則位△行幸△御幸△名所△旧跡聞程にハなき物と、人ことにいへとも、見ところなきにあらす△花の明ほの△くまなき秋の月△おほろ月ハ春のよ△昔より月ハ秋の物に申ならハし侍れとも、四季おりおりに、半月よりみち〳〵て、又三か月になるまて、おもしろからすといふことなし、源氏物かたりにも、とき〳〵につけゝる花もみちのさかりよりも、冬野にすめる月に、雪の光あひたるこそ、あやしう色なきものゝ身にしミて、この世の外のことまて思ひやられて猶も」おもしろさも、哀さものこらぬおりなれ、すさまじき為しにいひけん人の、ここ　二十オ
ろあさゝよとかきをきしもことハりにおほゆ、ふゆの月ハ、ひときは見ところあり（たゝ）うは玉のやミの空こそ物たらハてわろけれ、されともふゆハそこはかともみえぬ※「す」くらき方より、雪のむら〳〵とふりくたり庭もまかきも白たへにミゆるも（やミのよにも）おかし、夏ハほしあひの空なかむるも涼しく、ほたるとひつれ光もてありくに、いつくともしらぬ空に、ほととぎすのひとこゑふた声おとつれてゆくこそゆかしけれ、よろつに　二十ウ
心をと（※と）めて見ハおもしろからすといふ事なし、心なき人はしるへからす」

めてたくミゆるもの

△とめる人の家のうち△元日の祝の式義△よめとり、むことりする所△子とも（おはく）ならへ「ひ」すへてとめる人の思ふ事なけなる△かかりの松の木の、おほきに物ふりたる△たうてらにやとうの、をこなひのたえさるゆかしけなきもの

△ことい牛△やせ馬△くちはみの類△こうのはけたるねすミ△あきはてのきたる妻△としよりたる遊女△行ちかふ道行人にも、八そちはかりのミつわくむ女こそうたてしくおもハまし、年」よりてよき物あり、老僧のはと　二十一オ
のつえにつらなりたる、たうとくミゆ△神の御前のねさかんぬし△神楽のみこ、としよりたる程、神さひてありかたく覚ゆ△貴人高人の御母儀、老おとろへ給ふ程聞よし、其外せん方なきハ女のとしよれるなるへし、小町は、百とせにをよひて、あさましく露の命もかさりとなりしかハ

わが身をハ身こそハおもへはかなくもてつからしつる山をくりかな　とよみて、ミつからいさりもて行て、野へのつちとなりぬ、まつよひの小侍従ハ、姿いうにこころやさしくきこえしか、いたつらに月日積りて、くちひそミあらぬかたちをくちおしくや思ひけん」　二十一ウ

思ひやれいそちの年の暮なれはいかはかりかは物ハかなしき　といへり、かゝるうつくしくきこえし人たにも、老て後ハかなしきに、いはむやつゝはたちにてたにも、よくもあらぬかたちのなからへなむ後のはてこそたてけれ、こころのままならぬ事とハいひなから、ねかハくハ三そち、四そち、しゐて、五そちまてもなからへていらさることなるへし

なりやすく見えてなりかたきもの

△こそうへしなり物の木△仏法の道△上手のけい△げこか、上ごのまね△くわほういミしき人のまね△たけきもの丶ふのこゝろ△むびやうなるもの丶まね△賢人△聖人の心」△詩哥の道△かつきするあま△ちからわさ△ひけわたし△うそわたし　二十二オ

成かたくみえてなる物

△ふう婦の道△木のミのつき木△渡居△かへる子つたなきわらはへの、経のよみはしめ△万のみちこころにノてせは、ならぬといふ事ハあるましき事にや、男女にも、智恵にもよるへからす、せいをよくとゝのへて、こころにたにいれは、かたさわさもやすくおほえしるへし、大事のげいをけつく、おろかなるものかならすよくしりえて、後にハ上郎にいたりぬ、是ハをのれつたなきゆへ、」一心にかけてけいこするゆへなるへし　二十二ウ

見あなつらるゝもの

△となりにかきのなき家△出家のふへんだていふ△物いひへたのからかひ△ひくにのてら△ごけい△やまめ　△国郭のしゆごに、よき臣下なきと聞△人中にて口聞すくすもの△心うつくしとさく人うつくしと聞人

見てよりにくきもの

△はしりたる馬の人くいげなる△よき大将の城に籠△おほきなる猿△犬の人くい△かと〳〵しく物いふ人△いはらさかもさ引たる所」△はや河の瀬△そこふかくけハしき、岩ほのあたり△猪のたけりぬる　ふするのとこといへハなつかし　△上ひた　二十三オ

る老人の御そは　△敵みかたいれみたれてたたかふ所　△詩哥連哥のさしきも、心しらさるものハよりにくかるへし　△茶のゆ者の数寄のあたり（も）　△たけくばち（ママ）あたるといふ神の前△おほきなる、はちのすのあたり△もゆる火の中

たうとさもの

△内裏御八かう△ごまし（ママ）ゆする、れいの音△同本尊の次第△たつときちしきの、かうさの説法△りんさいのさんかく△くわんしやうの次第△千人僧の、供養△高野の、奥院△たいたう△こんたうのくやう」△春日の夜灯△二月堂の、をこなひ△山門大衆の入堂、これらはミぬことなれとも、人のかたりしままにかく、いまたうとき事世におほからむ、ことくとくてかかす　二十三ウ

ねたき物

△思ひかけし人のもとへ、こと方よりかよふと聞人のこころ△我ならふことを、そはより聞覚えたる△ひいきなる方の、いくさにまけたる△碁双のしよむにまけて、振舞したる△かはらしとかたく契りし人の、あらぬかたへこころうつろふと聞たる

△めなしとちにとられたる△花合、草あはせにまけたる」△春秋の比おもハす、山林に行てはつ花、初もみちの色ことにさかりなるをミて、かはかりとしりなは、うとからぬ友をもいさなひきて、花の本にゐ（ママ）いをすゝめ、こうようをもたかまし物をと、ねたからん物也、されはこそふるき哥にも　二十四オ

見わたせハもみちしにけり山里にねたくもけふハひとりきにけり

あいらしき物

△いぬはりこ△ひいなの類△ひよこ△すゝめの子△ねこの子△さくら草△ひめゆり△せきちく△千なりひようたん△くまかへといふ桜△ぼんさん（ママ）の、ふるびたる（※ママ）△花ミのなるハなを△名人の」ほり物△からこかきたるゑ△名のあひらしきハ△いちこ、岩なし△さゝめくり△ほうつき△いちやう（ママ）△れいし△松子△松露　鳥にハ△山から△ひから△千とり△には△河せミ△かいつふり、貝にハ△あふびかい（ママ）△ほたて（貝）△かぶ（※ママ）と（かい）△しゝめ（同）△すわう（同）

すくれていらぬもの　二十四ウ

△女のちからわさ△僧のぶへん△なか袖のへいはうたち△ちこ若衆の大食△世をすつる女のミめ△そのみち〳〵
にいらぬげいすく人こそせんなけれ、おほきにてあしき物△ひめうり△ゑのこ△女のせいもさのみおほさにて、
あらすともあらんかし」　二十五オ

すくれてよき物

△男のちから△人のぶへ「け」ん△よろつのげい△男のきりやう△ちこ、若衆、女のミめ△学文△手かき△武家
のぶへん△和哥のみち、いつれもすくれてよし

さひしくすさまじき物

△つたかつら、はいかゝりたる家のうち△軒はに夕かほ、はいたる小家△竹かきまハらにして、草ふかき寺△藪
のうちに、わらやすこしみえて、うすけふりたちたる所△しほやのけふり△夜ふかくたゝくくゐな△とをき笛の
ね△ぬえとりのなきたる△山中にむさゝひ」△猿のさけふこゑ△断猿今夕活衣と、古人の申せしも、けに理也と　二十五ウ
覚ゆ△ふくろふの程ちかくきなくもさひしくす（さ）まし△冬の夜、なくきつね△送おほかミの声△入相の鐘△
山中にとちこもり、ふかく世をいとふ人の、心すこくおもしろからむ心こそ、うらやましけれ、こゝろしらさら
ん人ハ、草の庵の露けさ（も）物わひしく、うるさからまし、さおもふ人の玉のうてなも、住はてぬ世こそつら
けれ、されハこそ蟬丸の哥にも

世の中ハとてもかくてもおなしこと宮もわらやもはてしなければ

定家の哥に」

なけかれすおもふこゝろにそむかねハミやもわらやもをのかさま〳〵　二十六オ

△人のうせたる家のうち（すさまし）△火をかぬいるり△なき人のちういんむすふ所△夜ふけてなきから、送る
に行あいたる△鳥へ野、船岡、五さんさい△はけ物あるといふ所ハ、めに見えねとすこくおそろし△心ほそく
すさましきハ、人の死するをみる心△遠国へ行人の心△うみ中へこきいたしたるふね

いまこの比世にはやる事　付又いやかる事

△おり〳〵はやるだて道具△数寄の道　同すきやのさくじ　△出すきめにたつきる物　△又中〳〵めにたたぬきる

物△れんほ」の道△酒宴の遊△物見のあそひ△人のいやかる事（アリ）△無心の所望△むつかしき、さしきの遊 二十六ウ
△おもふとち、あはむと契る夜の、なか客人 △すいきやうする人の参会 △主君の供して、物みる事△食物しいられたる△いたきくるひ△物いるゝ事△としよりこし（かゝ）まれる女のさかつきを、思ひさしなむハラたてからん、されともある人のいふやう、おもふ人のましる所にてハ、中〳〵わろきさかつき、興有ておもしろしとかたりし、世をのとかにすくす人の前にて、後の世のすゝめ、ひたといふ人こそうたておほゆれ、ゆふへの期をもしらて、心の花とくらす人に、仏法の道いひきかせ、俄にさそひなハ、かひあらむや、あな」かしこ、そのみち〳〵にすかん人の、こゝろ〳〵にしたかひて、いはまほしき物也、もし思ひ取て我と心のひもをとき、ゐひ 二十七オ
のまゆのひらきなむ時、はかなき世の夢をも、さとらしめん物なるへし、何はにしらす、心に思ひよらぬ事をいひきかせても、知恵あらん人ハおもしろく心えて、万にさとく思ひとる物なれとも、さもなく心そまさらん人ハ、かされてかくいふ人と行あふも、むつかしくおもふへし、されハ仏の一代の説法ハ、無量なり、其事を聞に、八万聖教、皆方便の説也、色こそかはれしなこそちかへおなし心なり、こゝろある程の人、有為無常に、 二十七ウ
こゝろをつけさるといふ事なし、ことのはに出しいはすとも、人の」こゝろえハ、さしよりても見えぬ物にかは、たゝねかひてもねかハしく、いとひてもいとハしきハ、人間有為の身にこそ侍れ、金剛経ニ云、一切有為法は、女夢幻泡影、女露亦、女電ととき給ふなり、みる事も、又我なすわさも、眼、耳、鼻、舌、身、意よりおこるゆへ也、華厳経ニ曰、三界唯一心、心外無別法、心仏及衆生、是三無差別と聞時は、まのあたりに、こしんのね絶、唯心の、浄土みえ侍るなり、よろつのまくまふさうをハらひすてゝ、本分の都へいたりぬへき事、うたかひあるへからす、さる程に世間人間の有さま、いふも虚空、いはぬもまた、夢中の夢なるへし、されは、只、色即、是空、々即、是」色と心得侍るへき事也 二十八オ

慶長七年五月廿五日雨中ニ書是也」 二十八ウ

〈註〉仏・万・声・会は原本では旧字体である。